

## V 紀要

### 主な新収蔵品の紹介

■平成 24 (2012) 年度



藤懸静也博士寿像（下絵）  
昭和 16 年（1941）  
紙本墨画淡彩・未表装（平成 26 年度に軸表装）  
57.8×42.0 cm

「藤懸さんに畫室まで来ていたゞく。（中略）多くの場合、下繪へはスケッチを手本に引き伸ばすのが慣ひだけれど、今度は寫生を直に下繪とすることにした。少しでも生の姿をそのまゝに、間に介在するものを省きたいと思つたからであるが、四度目には下繪のほかにはスケッチに還つて、出来るだけありのまゝに委しく、寫眞がはりの参考にと、色をさした寫生をとゞめて、それですべての準備的な仕事を終つたのである。」

（「藤懸博士の肖像」

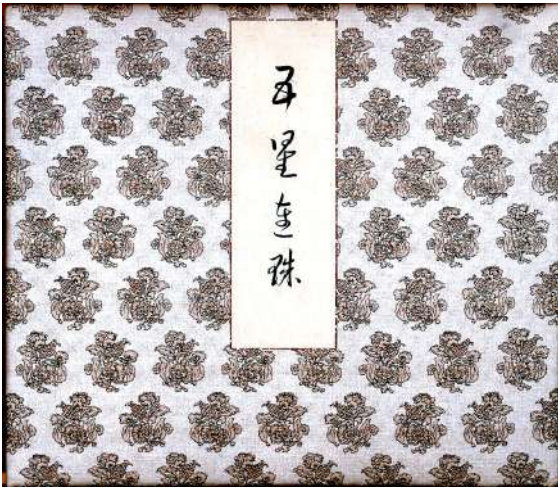
『鏑木清方文集 一 制作餘談』



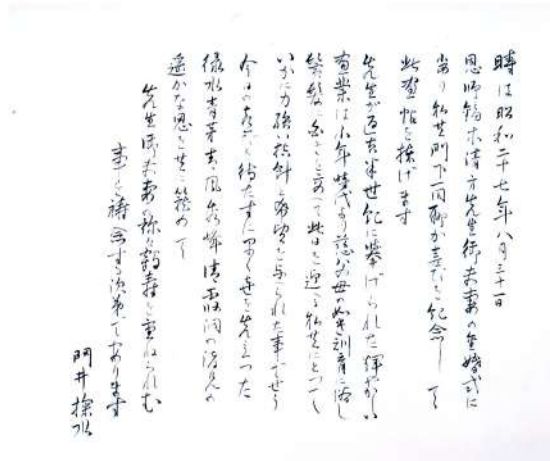
一葉（未定稿）  
昭和 15 年（1940）  
絹本墨画着色・未表装  
（平成 26 年度に軸表装）  
151.0×79.0 cm

「下繪にかゝつたのは九月十七日。  
九月二十日、下繪先づ成る。  
二十七日、墨描をはじめ。  
二十八日地ぐま、二十九日書損、  
新たに絹を張る」  
（「一葉」

『鏑木清方文集 一 制作餘談』



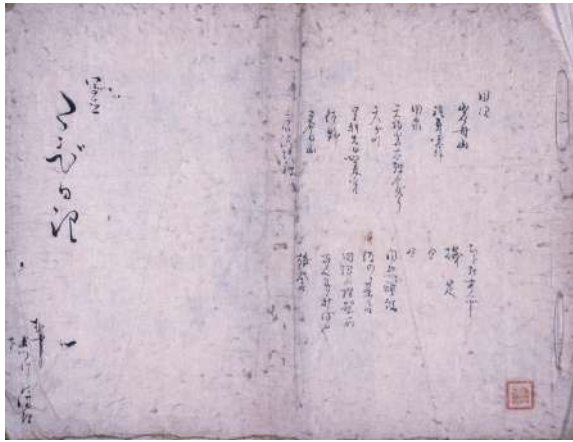
五星連珠 (弟子の寄書)  
昭和27年(1952)  
絹本着色・画帖  
39.6×45.8 cm (表装寸法)



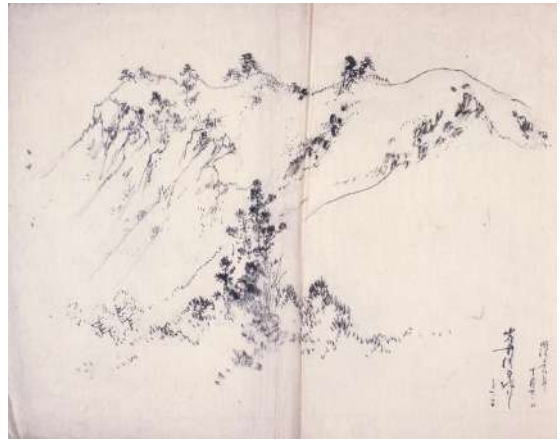
門井掬水



西田青坡



写生たび日記 表紙  
 明治28年(1895)  
 紙本・墨・画帖  
 25.6×33.4 cm



写生たび日記 三枚目  
 鉛筆・墨画  
 (岩船停車場よりの風景)



写生たび日記 十三枚目  
 墨画・一部淡彩  
 (野州佐野駅)



写生たび日記 十七枚目  
 鉛筆・墨画  
 (唐沢山神社)

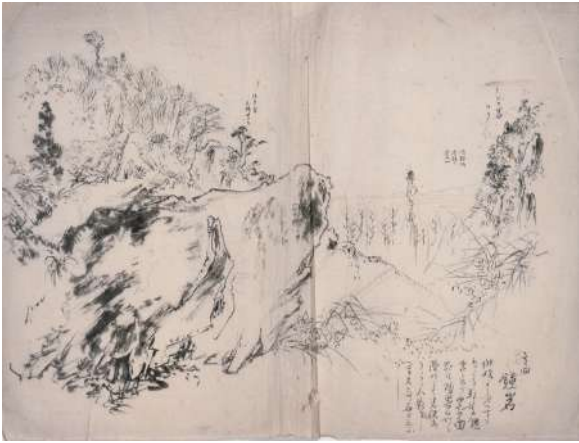


武さし上下野 旅日記 一の巻拾遺 表紙  
 明治28年(1895)  
 紙本・墨画淡彩・画帖  
 24.2×32.7 cm

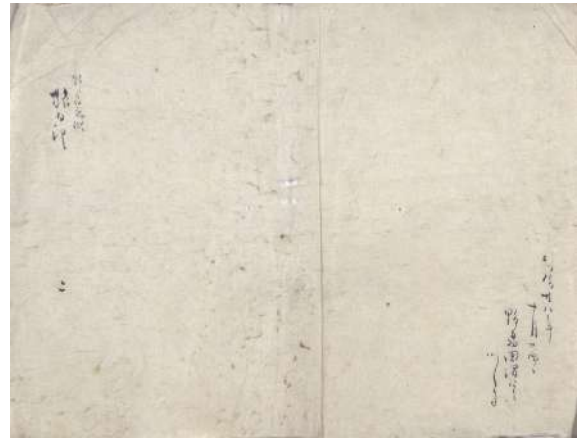


武さし上下野 旅日記 一の巻拾遺 二枚目  
 鉛筆・墨画・淡彩  
 (唐沢山新道)

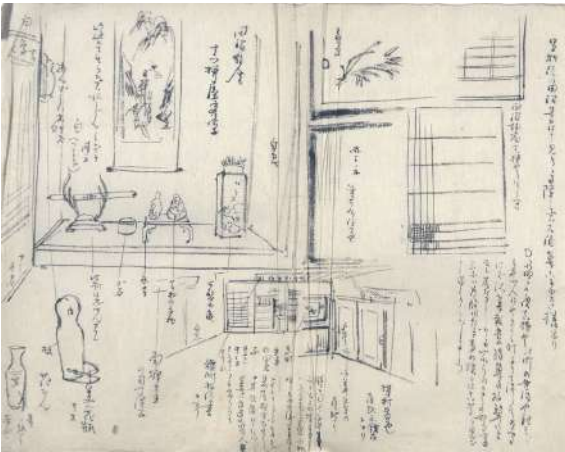




武さし上下野 旅日記 一の巻拾遺 四枚目  
鉛筆・墨画  
(鏡石)



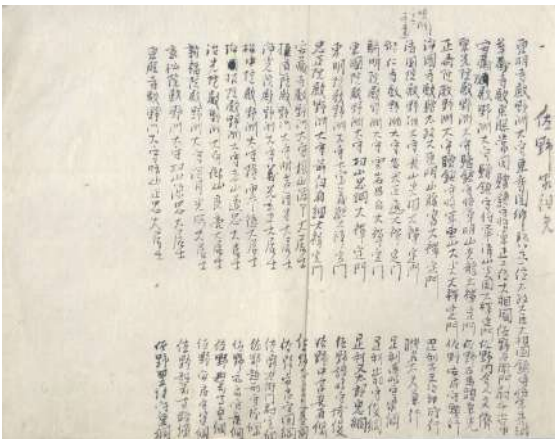
旅日記 二 表紙  
明治 28 年 (1895)  
鉛筆・墨画  
24.2×32.7 cm  
(野州田沼にて)



旅日記 二 二枚目  
墨画  
(田沼旅舎 真柳屋客室)



旅日記 二 五枚目  
墨画  
(台所)



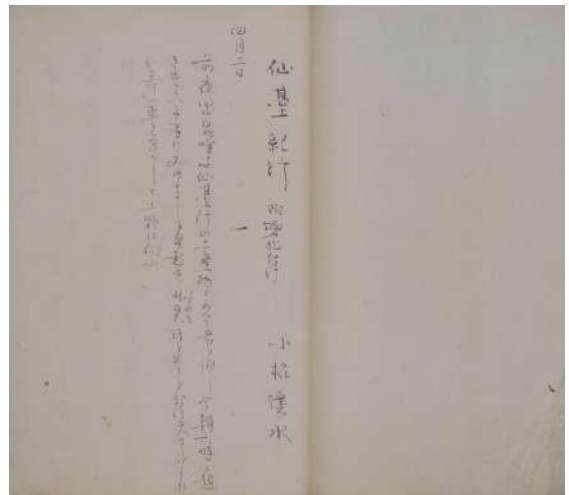
旅日記 二 八枚目  
墨  
(佐野家祖先)



旅日記 二 十枚目  
[上] 鉛筆・墨画 (岩舟山)  
[下] 墨画 (高勝寺境内)

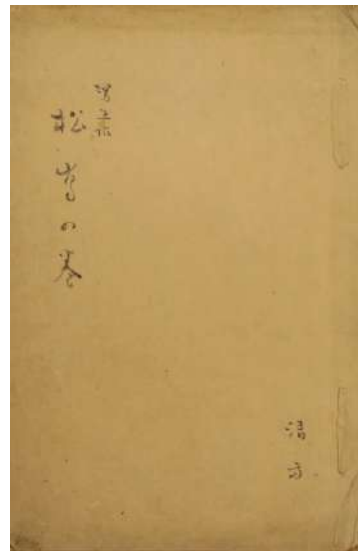


仙臺紀行 上  
 明治30年(1897)  
 紙本・墨・画帖



仙臺紀行 上 (一)

「何處かの芝居で會つての話に、「僕が小説をかいてゐる、仙臺の『東北新聞』に、挿繪をかいてくれないか」と、岡さんから切り出された時には、急にあたりが明るくなつたやうな氣がした。(中略)三十年の春、二日續きの休みを利用して、岡さんと仙臺へ出かけた。」  
 (「湯島の住居」『こしかたの記』)



寫生帖 松島の巻  
 明治30年(1897)  
 紙本墨画淡彩・画帖



寫生帖 松島の巻 舟中



寫生帖 松島の巻 五大堂の雨



写生帖

明治24年(1891)8月1日

紙本墨画淡彩・画帖

32.0×24.8 cm

「母に連れられて、神田東紺屋町の年方先生の許に弟子入したのは、明治二十四年七月のなかば過ぎてのことであつた。先生は慶應二年の出生で、その時はかぞへて二十六歳になる。(中略)大半紙一枚に朝顔の鉢植を、毛筆、淡彩で、覺束なく寫生したものが、古い綴込帳に見出される。その日附には八月一日とある。それが弟子入の後、通學の第一日なのであらう。」

(「年方先生に入門」『こしかたの記』)

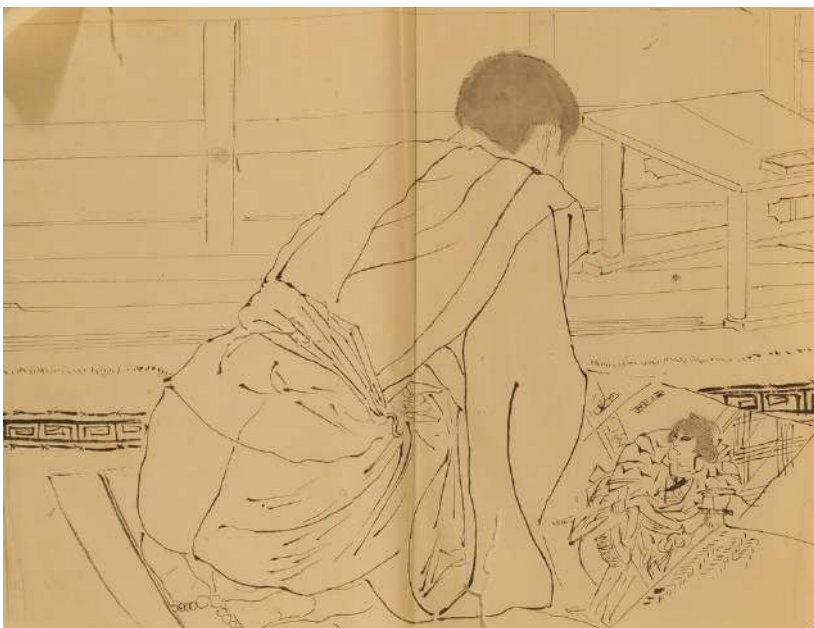


写生帖

明治24年(1891)頃

紙本墨画一部朱線・画帖

24.7×32.0



写生帖

明治24年(1891)頃

紙本墨画・画帖

24.7×32.0





模写（月岡芳年作品）  
 明治 25（1892）年頃  
 紙本・墨・画帖  
 27.6×38.3 cm

「私より一と月後れて、「やまと新聞」の彫刻師山本の息子で私と同年なのが入門し、笠原、浅野、田島、渡邊、と、これだけが一年ばかりの内に續いて弟子入をした。先生の机を中心に、左右向き合つて机を並べるやうになつたので、さうでなくても狭い室は、周圍を歩くことさへ容易ではなかつた。前に川邊御楯に學んだという渡邊の他は、どれも同じやうに、敷寫しか模寫か、花ものゝ寫生をする程度なので、こちらの方は小机で用は足りたが、先生は版下以外の大きい制作には、畫かうとしてもどうにも擴げる席がなかつた。」

（「年方先生に入門」『こしかたの記』）



模写 うつし画の集  
 明治 25（1892）年頃  
 紙本墨画・画帖  
 27.5×20.0 cm